
包丁さんのカケラ

狂風師

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

包丁さんのカケラ

【コード】

N0929N

【作者名】

狂風師

【あらすじ】

主人公は満足のいかない生活を毎日過ごしていた。

そんなとき・・・

(前書き)

原作は「包丁さんのうわさ」というフリーゲーム。

というか包丁さんの出番はほとんど無い。ちょこっと出てくる程度。

設定は、かなり無視した。なのでほとんどオリジナル作品。

包丁さんを知らなくても十分読めるかと。

思っがままに書いた作品。グダグダ注意。

妹「ねえねえー、あそぼー」

・・・出た。妹のいつもの。土曜日はいつもこんな感じ。

おっと、自己紹介がまだだったな。俺はどこにでもいそうな高校三年生。

学校じゃちょっとした有名人。・・・ある意味で。それは、まあいい。

ゴミ箱にでも捨てておいてくれ。

妹はロリ・・・じゃない。何でもない。聞かなかったことにしてくれ。

あなたは何も聞いていない。何も無かった。そうだろ？

妹は中学一年生。絵がやたらと上手い。同人誌でも出したいくらいだ。

と、まあこんな感じ。性格？ その内わかるんじゃない？

俺「いいや・・・書くのめんどくさくなってきた・・・」

と、今までの俺が書いてた小説もどき。現実はそのなにも美味しくない。

妹「何、一人でブツブツ言ってるの？ キモチワルイから」

・・・これが現実。嵐のように文句を言いに来て、嵐のように去っていく。

一応、言っておこう。俺や妹の年齢とかは、さっきの小説もどきと同じ。

せめて、せめて小説の中だけでも甘い夢が見たかった。それだけ。

今は13時半。自分の部屋で小説を書いていただけなのに・・・。それも叶わない。

俺に甘い夢なんてムリなんだ・・・、と実感する。

俺「あーあ・・・、アニメの世界にでも入りたいよ・・・」

けっこう、本気で思っているから怖い。家にいれば、さっきみたようになるし。

かと言って、出かけるあても無いし、友人もいない。

そんな毎日。でも、それが現実。

座っているイスに深くもたれて、溜め息。現実の味を肺まで吸い

込む。

不味い。泥水のがまだマシだ。

こんな事をまたブツブツ呟いていると妹がやってきて

やめてよね。なんて言ってくる。

好意の裏返しで、好きなのに冷たく接する。なんてよく言ったものだ。

妹はただ嫌っているだけ。『ツンデレ』とか『クーデレ』なんて二次元だけのもの。

所詮パソコンの中だけでの話だ。

『現実是非情である』

そんな言葉を思い出した。あるイベントで司会の人が連呼していた。

その通りだと思う。現実なんてそんなもの。

そう言い、また溜め息。一日に何回するのか。二十回は余裕である。

イスから降りてベッドにダイブ。朝起きてから直されていないベッド。

するとまた妹が来て

うるさい。の一言。もう慣れてるけどさ……。もうちょっと
言い方を……。

そして、出来ることなら俺をアニメの世界に……。これも、もう
いいか。

家出する、というのも考えた。でも、その後どうするかまで考え
れない。

頼る友人もない。親戚は遠い。まず、金も無い。

また、溜め息。溜め息を一つすると、幸せが一つ逃げていく。何
て言うが

そんな逃げていく幸せも、もう無いだろう。そんなの残っていな
いのだから。

電話が鳴る。携帯じゃなく、家の固定電話。生憎、俺はケータイ
とか言う

便利な物は持っていない。俺だけ時代についていけてない。そん
な感じ。

妹「でんわ」

いつもより少しマシな言い方。そんなことはどうでもいい。

俺に電話？ 一体誰が？

妹に、誰？ と聞いてみるが無反応。まあいいぞ。

一階に下りて電話に出る。

俺「もしもし」

？「スグニ ソコカラ ハナレロ」

俺「えっ・・・？・・・ど、どちら様ですか・・・？」

正直怖かった。いきなりそんなこと言われたら、誰だって怖くなる。

？「イイカ スグニ イエヲ デロ」

ツーツーッ。・・・えっ・・・？ 何だったんだ・・・？ 聞き覚えの無い声。

機械音みたいな声。女性の声だった気がする。声に抑揚が無かった。

たちの悪いイタズラ電話だろ、きっと。昔何回かあったが、もう十年も前のこと。

その時の是最悪だった。まあ、それはどうでもいい。

特に気にしない。ただのイタズラ。 そう思っていた。

二階の自分の部屋に戻ろうとしたとき・・・何かを刺すような音。
脚が震えた。俺の部屋からそれが聞えてくるのだから。
恐る恐る近づく。心の準備なんて出来ているわけが無い。
4、5回その音がすると、音は消えた。静寂。
俺の荒い息だけが響く。

ついに部屋の前の扉に辿り着く。

そして・・・一気に開けた。

と、いきなり生臭いにおい。そして辺り一面の

血

床、ベッド、イス、天井。全て紅い。窓ガラスも本棚も。

しかし、一箇所だけ血の無い場所。床の一部。

ちょうど人が倒れてるような形で、血に染まっていない。

血の出ている原因のようなものは無く、紅い事以外はいつも通り
の部屋。

何が起こっているのか、さっぱりわからない。・・・そう言えば
妹の声がしない。

まさかな……。なんて思いつつ、妹の部屋に入る。……。いな

い。
下にいるのか。と、自分を安心させる。だが、一階にも誰もいな

い。
両親は仕事。

なんだよ……。どうなってるんだよ……。

すると、また電話が鳴り響く。出たくない。出たくない。

しばらくしても、一向に鳴り止まない。仕方なく電話に出る。

俺「も、もしも……」

？「ハナレロト イッタハズダ」

またこの声。俺は怖くなって受話器を投げ捨てた。

が、声だけはなぜか聞えてくる。

？「ハヤク イエカラ デルンダ」

その言葉で電話は切れた。

身動きできない。体が言うことを聞かない。俺に……。どうしろ
と……。

しばらくして家を出る。サイフ、カバン。それだけを持って家を出た。

カバンの中身は500mlペットボトルの水一本。

外はようやく茜色に染まるか染まらないかという時間。

行くあても無く、ただ気の向くままに歩く。電話でも『家を出る』

としか言っていなかった。何もすることなど無い。

やっぱり家に帰ろう、とも思った。でも、あんな血の海の家なんて嫌だ。

とりあえず喫茶店へ。飲み物だけ頼んで、時間を潰す。

確認したサイフの中身は3000円。俺にサバイバルでもしろと？

道具なんて何も持ってないぞ。

外が暗くなるまでそこにいた。これ以上は無理だ。精神的に。

外に出る。が、やはりすることは無い。自然と足は家に向かっていた。

が、現実是非情である。

もはやこれが現実と言えるのだろうか。

玄関の扉を開けると、生臭い。嫌な予感しかなかった。

それでも僅かな希望を信じてリビングに向かった。

だが、そこで見たのは 死体

血だらけで倒れている両親。

顔、喉、腹、脚。全て切りつけられた痕があった。

両目は潰れ、中の液体が出てきており、鼻は無くなり、

腹からは内臓が飛び出していた。

もちろん息などしていない。

俺はとたんに気持ち悪くなり、吐いた。さすがにこれには耐えられない。

二次元のはよく見てたが、それとは比べ物にならない。

食べた物、飲んだもの、全て吐き出した。それでもまだ吐き気がする。

また電話。電話はリビングにある。親の死体と一緒に。

出れない。無理だ。あんなの、もう見たくない。

その思いが伝わったのか、または出ていないのに声が聞える。

？「ニゲロ トニカク コノイエカラ ハナレロ」

それを聞き、俺はとっさに走り出した。もう頼れるのは、あの電
話の人だけ。

いろいろとおかしいが、俺はそれに頼るしかない。それだけが俺
の助け。

随分と走ってきた。とにかく北へ北へ逃げた。まっすぐに大きな
道路沿いにきた。

ここがどこだかわからない。

もう夜も遅い。俺の体感ではそう感じた。腕時計を持ってこれば
よかった。

なんて後の祭り。

そう言えば晩飯がまだだったな……。食べたいとは思わない。

ふと見た店の時計は7時半を指していた。まだ7時半。

飯も食べないとすれば、寝床の確保。

公園で寝る、という選択肢が一番だと思った。とりあえず寝よう。
そう。

運良く公園を見つけた。いつもは『運』の『う』の字も無いのに。
適当に人が来ないようなベンチに横になる。

今日はもう疲れた。寝よう。眠ろう。目を閉じた。

？「おやすみ」

聞き覚えの無い少女の声。目を開ける間も無く腹部に激痛。

痛みで目を見開く。そこに映ったのは

？「さよなら」

もう一撃。遠のく意識。

ああ・・・そうだ・・・。包丁さん・・・。

ほんとうの・・・なまえ・・・いわないと・・・。

そこで意識は消えた。

別に死後の世界など信じちゃいないが、もしここがそうなら、そうしよう。

場所などどうでもいい。

俺は包丁さん呼んだ。『家族の命』と書いて。

だが、謎が残った。

- ・妹であろう消えた死体
- ・電話の声の主

包丁さんはこんなことしない。

何か他の事件によるもの。または、別の『何か』

ここまで物事を発散させてしまった。収集は出来そうに無い。

これを読んでいる貴方。あなたの心の中で、この一連の物語を解決して欲しい。

俺はもう動くことすら出来ない。

代わりに、この混沌とした小説の世界に終わりを与えてくれ。

(後書き)

だからグダグダ注意と言いましたよ？

模試中に時間が足りまくったので書いてしまった。

後悔も反省もしている。

自分でも書いてて訳がわからなくなった。どうもすみませんでした。

最後は全部包丁さんのせいにしてしまった。包丁さん、ごめんなさい。
い。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0929n/>

包丁さんのカケラ

2010年10月28日03時52分発行